もありませうからと、平謝りに謝つたと和尚は昔物語りに物語つた。杵築の津崎某の家に伝ると云う古記録を見れば、宗麟の墓である事が更に明らかになつて来る訳である。それは大分大学又は杵築方面の史家の研究に俟つことにしたい。菩提寺云々の問題に就ては慶長十八年（一六一三）ヨセフ師が津久見の宗麟の墓地に天主堂を建てた、その吉支丹寺天徳寺が佐伯の長谷に移つた事から考えて、天徳寺こそ菩提寺である事は明らかで、今更論ずる迄もなかろう。二九、七、二三、稿

（医学博士　津久見市下青江）

郷土史話

## 大野直入両郡良兵を出す

武士の発生は、牧や騎猟と関係がある。東国地方に早く武士団が発生したのも、そうした面から理解される。令制では軍団の馬匹は、国毎の牧から補給される規定である。たゞし豊後の牧は明記されてはいないが、令の精神からは当然置かれた事が考えられるし（西岡氏荘園史の研究）、然らずとも私牧が存したであろう。大野・直入の原野は最も適地で、牧口等の地名からも推定される。天長三年（八二六）政府は辺要の軍団が、農民の生活困窮のため衰頽に潮したので、この制を廃して選士の制に改めた。その官符に「豊後国大野直入両郡は騎猟之児を出す、兵に於て要と為す」と述べ、両郡の男子が騎猟にすぐれ、兵士として不可缺である事を強調している。平安末期に、いち早く大野泰基や緒方惟栄・阿南惟家等の在地武士が出て、源平合戦等に活躍するのも、こうした地域的背景を考える事によつて、はじめて合理的に理解される。（渡辺澄夫）